二

磐音が外堀町の大照院の宿坊に戻ると、中居半蔵が顔を真っ赤にして、

「次太夫め、なかなか落ちぬわ」

と手にしていた竹棒を投げ出した。

かたわらにはお徒組別府伝之丞ら若い藩士たちが四人ほどいたが、知っている顔は別府だけだ。

江戸勤番の三年と浪々の暮らしの間に、磐音の知らない顔が増えていた。

「番頭の清蔵がすでに喋っておるゆえにすぐにも吐くと思うたが、さすがに一家を束ねる頭領、頑強にも口を割らぬ。磐音、そなたが奪ってきた帳簿やら備忘録を示して問い質しても、私にはご家老の宍戸文六様が付いておられると平然としたものだ」

時間に迫られた中居半蔵は、かなり強引に問い詰めていた。

小者に水を貰っていた次太夫の衣服は破れ、背中には血が滲んで、傷を負っていた。その次太夫が、

「中居様、時間の無駄にございますよ」

とざんばら髪の、不敵な顔を上げた。

その不敵な面魂には計算が働いていた。

「すまぬが、ここは中居様とそれがしだけにしてくれぬか」

と若い別府伝之丈らを外に出した。

「西国屋どの、そなたも商人なら忠義よりも利が大事であろう。われらはそなたの命をとったところで何の益にもならぬ。が、無益とあらばそなたの命、始末するに迷いはない」

「坂崎様に殺されれば西国屋、本望にございます」

「そなた、先ほど、国家老の宍戸文六様が付いておられると申したが、もはや、文六様は終わりじゃ」

磐音は、江戸の下屋敷で藩主の福坂実高手ずから渡された書き付けを次太夫に見せた。

「大名家臣の忠義は藩主ご一人にある。いくら国家老でも藩主にはかなわぬ。商人のそなたにもそのくらい察しがつこう。勝ち船に乗り換えぬか」

磐音の誘いを西国屋次太夫は瞑想して考えた。

長い沈黙の後、

「お願いがございます」

と言い出した。

「申してみよ」

「城中で証言する代わりに、私と家族、奉公人の助命をお願い致します」

「よかろう」

磐音が即答した。

「次に西国屋の財産を保証してくだされ」

「西国屋、舐めるでない」

半蔵が磐音に代わって怒鳴った。

「そなたは長崎に出店を持っておるではないか。関前の店と財産は、藩再建のために使わせてもうう」

次太夫が二人に頼んだ。

「承知した」

次太夫がほっと安堵の色を見せた。

半蔵も顔を和らげて言った。

「坂崎、江戸での不正借り受けの策を発案したのは宍戸文六だったぞ。大阪の両替商天王寺屋五兵衛と近江屋彦四郎を紹介したのはこの男だ、番頭の清蔵が喋ったことだがな」

「火事のせいでえらい損でしたわ。ご家老様はおかんむりやし、仲間には恨まれるしで、骨折り損のくたびれ儲けや」

次太夫は安心したか、上方訛りで本音を漏らした。

「文六め、一万六千五百両の借財を正睦様におっかぶせて強引に腹を切らせ、すべてを闇から闇に葬り去る気だ」

「父上は、己の考える所を述べるだけと申しております」

「坂崎、本日の会議はことの正否を問うではない。文六は宍戸派の数を頼りに、強引にことを決するつもりだ」

「出席は宍戸文六様のほかにはどなたですか」

「殿の参府に大半の藩士が随行しておるので、老人か小物ばかりだ。御番組頭の山尻三郎助、宍戸文六の嫡男で御手廻り組の宍戸秀晃、用人山鹿岳晴、記録所役の出水竹九郎、右筆の榊原千代蔵あたりかな」

「山尻様は参勤ではないのですか」

「昨年の事件以来、殿の信頼を失くしてな、江戸への随行には加えてもらえなかった。そのせいで近頃、宍戸派に急接近しておるそうな」

河出舞の不義話を撒き散らしたのは三郎助の次男、頼禎であった。頼禎は小林琴平に斬り殺されている。

半蔵が言うところの殿の信頼を失くした事件というのはそのことをさす。

その父親が宍戸文六に急接近している以上、手強い相手となる。

「嫡男の秀晃様は別にして、宍戸様の息がかかった方はどなたにございますか」

「用人の山鹿、記録所役の出水か。榊原様は耄碌なされて宍戸文六殿の言いなりであろう」

「頼りは中居半蔵様だけですか」

「とは申せ、正式に呼ばれたわけではない」

そう言った半蔵は、

「大書院の周りには、宍戸派の手勢が控えておると考えたほうがよい」

「中居様、わがほうの人数はどれほどですか」

半蔵は別府ら若い藩士立ちを振り見た。

「別府の下に中戸信継道場の面々が七、八といったところだ。いずれも若い連中だ。中戸先生も、非常時でござればそれがしも手を貸すと言うておられる」

「ありがたき申し出にございます」

中居半蔵が若い伝之丈らを呼び込んだ。

「終わった」

と半蔵が伝之丈に、西国屋が協力することを伝え、

「磐音、そなたが別府らを束ねてくれ」

と言うと、伝之丈らが磐音にぺこりと頭を下げた。

磐音は中戸道場の先輩にあたり、昨夏の御番の辻の小林琴平との対決は、すでに伝説の戦いとして語られていたので、若い藩士たちの眼差しには尊敬がこめられていた。

「坂崎、もはや刻限もない。それがしは屋敷に戻って用意をいたす。そなたにはこやつの扱いを頼もうか」

「承知しました」

中居半蔵が姿を消した。

「坂崎様、われらにお指図を」

伝之丈が磐音を見た。

「その前に、そなたの朋輩を紹介してくれぬか」

「はい」

と緊張して応えた伝の丈は右から、御小姓組の東武治、結城秦之助、市橋勇吉と名を告げた。

「武治どのは、東源之丞様の甥御か」

磐音は武治の顔を見て訊いた。

「はい。叔父には坂崎様のことを聞かされて育ちました」

と紅顔を磐音に向けた。

「結城どのの兄上は御廊下番海造どのであるな」

「はい、さようにございます」

「市橋どのの父上は御馬廻役じゃな」

「ただいま江戸に参勤しております」

名を聞かされよくよく見れば、皆知り合いの倅や兄弟だ。顔に見覚えがあった。

頷いた磐音が申し渡した。

「よく聞け。此度の一件、遊びではない。豊後関前藩の命運がかかっておる。そなたらも生半可な考えなれば後悔することになる」

「坂崎様、もとよりわれら命を賭して藩の改革に参画しております」

伝の丈が仲間を代表して応えると仲間も呼応した。

「よし、なればこれからの行動を申し伝える。夜のうちに、西国屋次太夫並びに番頭の清蔵を城中に移したい。なんぞ考えはないか」

伝之丈らが顔を見合わせ、沈黙した。

八つ過ぎ、磐音たちは縄をかけた西国屋次太夫と清蔵を漁師舟に乗せて、白鶴城の突端、豊後水道に突き出た断崖へと接近していた。その高さはおよそ七丈余りで切り立っていた。だが、引き潮のときには、海に向かって埋み門が姿を見せた。

老漁師は別府伝之丈の知り合いのものだった。

断崖に打ち寄せて砕ける波間を見計らって、練達の櫓捌きを見せる漁師は舟を埋み門に入り込ませた。

埋み門は城が包囲された折りなど、密かに海へと逃れる抜け道だ。が、もはや戦乱の時代は遠くに去り、埋み門自体が忘れられていた。

松明が灯された。

入り口の幅は一間もなかったが、奥に入ると大きく広がった。波が打ち寄せるたびに舟は天井の尖った岩に叩きつけられそうになった。

それでも半丁も進むと水面は穏やかになり、洞窟も広く、天井も高くなった。自然の岩場を削った船着場に舟を接岸し、磐音たちは舟と分かれることになった。

石段道が上へと細く延びていた。もう何十年と人が通ったことはないようで、松明の明かりに驚いた蝙蝠が飛び交った。

次太夫と清蔵を伝之丈たちが二人がかりで担ぎ上げ、松明を手にした磐音が先頭に立った。

この抜け道のことを思い出したのは、祖父が作事方に勤めていた市橋勇吉だ。

城から豊後水道に抜ける道のことを、小さいときに祖父から寝物語に聞かされたという。

その話を伝之丈の知り合いの老漁師に訊いてみると、引き潮のとき、埋み門が口を見せる断崖があると教えてくれたのだ。

「それがしはこんな抜け道など知らなかったぞ」

磐音の声が岩場に響いて、行く手から風が吹き込んできた。

磐音は松明を消した。

「暗いので気をつけてまいれ」

磐音は後に続く伝之丈らに注意を与えると一人先行した。石段が尽きて、洞穴のようなところに出た。風を頼りに外に向かうと、内曲輪の一角に出たようだ。

出口には枯草が覆いかぶさって穴を塞いでいた。

人が通れるほどの隙間を空けて磐音が外に出てみると、底は寅の口櫓の裏手だった。

この櫓は城の東側の櫓のひとつで、内曲輪では本丸から一番離れた場所にあった。

伝の丈立ちも姿を見せて、

「こんなところに来たのは始めてだぞ」

「おれも知らん」

などと言い交わしていた。

「もう少し本丸大書院近くまで接近しておきたいが、われらが潜む場所はないか」

「坂崎様、なれば中之門の物見櫓にわれらの仲間が二人、夜番しております。それがしが走って隠れ場所を相談して参ります」

結城秦之助がそう断ると闇に姿を没した。

坂崎正睦は七つに床を離れると、湯殿で水をかぶって身を清め、真新しい下帯にこれも新しい白の長襦袢を着た。さらに小袖に肩衣、半袴を身に着けた。

書斎の机に戻ると、この数日をかけて用意した弁明書や書き付けを改めた。

照埜が熱い茶を運んできた。

「照埜、もはや覚悟はできたぞ」

「中居半蔵様や磐音らが頑張っておるのです、あなた様もお心を確かにお持ちくださいませ」

「承知しておる。だが、磐音たちが人事を尽くしても儘ならぬこともあろう。そのとき、見苦しき真似だけはしたくないでな。苦労をかけるやもしれぬ」

「あなた様はなんの悪いこともなさっておられぬのです。私どもも正々堂々と敷を退出するだけにございます」

朝餉を終えた刻限、表口の竹矢来が解かれた。

駕籠が乗り入れられ、玄関先の横付けになった。

「行って参る」

正睦はいつものように照埜や伊代、奉公人に声をかけると、城中から遣わされた駕籠に乗り込んだ。そのかたわらを宍戸派の警護のもの立ちが物々しく固めた。

物見櫓から、藩士たちが石の坂を上って登城するのが見えた。

磐音たちは櫓の天辺に身を潜めて、時が来るのを待っていた。

まず登城してきたのは、宍戸派とみられる藩士の面々だ。前もって指示されているのか、三人一組になって、大手門から下乗門、さらには中之門と、だらだらと続く石段を上がってきた。

さらに御用人の山鹿岳春と記録所役の出水竹九朗が、肩衣に半袴の略装で姿を見せた。右筆の榊源千代蔵がよろよろと覚束ない歩きで坂を上がってきて、御番組頭の山尻三郎助も肩を怒らせて登城してきた。

「これで大書院の集まりに出ると目される連中はおよそ顔を揃えたな」

「いや、古狸と小狸の登城がまだだぞ」

伝之丈と秦之助が言い合っていると、中之門を乗り物が入ってきた。

なんと囚人のように綱を被せられた駕籠だ。

（父上、なんとおいたわしい……）

駕籠の周りを、抜き身の槍を小脇に抱え込んだ宍戸派の藩士たちや小者が厳しく警護していた。

駕籠はゆっくりと石垣に囲まれた石段を上がっていった。そして、磐音たちが潜む物見櫓の下に姿を消した。

磐音は物見櫓の反対に移動した。

そこから大書院に通じる玄関前門がかすかに望めた。

駕籠が玄関前門に到着して、警護の者たちが駕籠を取り囲んだ。

被せられていた綱が外され、引き戸が引かれて坂崎正睦が姿を見せた。すると藩士の一人が正睦の刀と脇差を取り上げた。

正睦は抵抗することなく渡した。

さらには昨夜から用意した弁明書などの書き付けを風呂敷を取り上げようとした。

さすがに正睦は抵抗の姿を見せたが、抜き身の槍の穂先を胸に突き付けられて、渡さざるを得なかった。

「なんと無体な……」

秦の助が抑えた口調ながら憤怒を込めて言った。

（父上、ここは我慢してくだされ）

磐音は胸の内で呟きながら、玄関前門で繰り返される無言劇のようなやりとりをじっと眺めていた。

前後を藩士に囲まれた正睦が城中へと姿を消した。

「あとは古狸親子や」

中之門を見張っていた武治が叫んだ。

「来たぞ！」

磐音たちは再び中之門を見下ろす場所に戻った。

宍戸文六はこれまでの功績と老体を考慮されて、藩主の実高から本丸式台前までのお駕籠乗り入れを許されていた。

「なんと、美濃部大監物が従っておるぞ！」

伝之丈が驚きの声を上げ、磐音もタイ捨流の剣術家を観察した

背丈は五尺八寸ほどか、がっちりと鍛え上げられた体は実に安定していた。

総髪の下の浅黒い顔、そして眼光炯々とした両眼が周囲を威圧して進む様はなかなかの貫禄であり、自信であった。

そのほか仲間二人も従っていた。

「狩野三五郎が怪我を負わされたというが、加減はどうかな」

磐音の問いに、

「狩野様は腰を打ち砕かれて、一生寝たきりの暮らしになるのではとのお医師の診立てにございます」

「なんと……」

磐音は言葉を失った。

「坂崎様、われらは未だ真剣勝負の経験がございません。もしこつがあれば教えていただきたい」

東武治が真剣な顔で訊いてきた。

「武治、真剣勝負にこつがない」

「ございませんか」

武治ががっくりしたように答えた。

「武治、勝負の場に臨む者すべてが胸に恐れと不安を抱いておる。どんな達人も同じことであろう。恐れを抱くということこそ、日頃腕前が発揮できる第一歩と思え。過信、傲慢よりも遥かに大切なことだ」

「怖くて普通なのですね」

武治がほっとした表情で答えた。

「坂崎様、訊いてようございますか」

今度は伝之丈が顔を向けた。

「われらはすでに生死をともにする同士であったな」

はい、と頷いた伝之丈が、

「親友の小林琴平様との勝負、なにお考えておられました」

若い藩士はすでに豊後関前藩の伝説となって繰り返し語られる御番の辻の決闘に触れた。

「琴平との勝負は、琴平が望み、それがしも琴平と戦うものはそれがししかおらぬと信じて立ち合う戦いであった……」

若い四人が真剣な眼差しを磐音に向けてきた。

「そなたらのように、琴平と愼之助とそれがしは物心ついたときからの友だ。生きるときも死ぬときも一緒と信じてきた友と戦うことがどれほどつらいか、戦った者にしか分かるまい。琴平かそれがしか、どちらが倒れようとも、互いが望んだ相手だ、その役を他人の手に渡すことなど考えなかった。それがしも琴平も死力を尽くして戦おうとそれだけを思った。剣に託した精進を出し切ろうと思っただけだ。それが友に示す尊敬の情だ。結果はどちらでもよかった。たまたまそれがしが生き残り、琴平は死んだ、それだけのことだ」

磐音の言葉は四人の若者の胸に悲しくも切なく響いた。

「そなたらが相戦うようなことがあってはならぬ。そのような場面を作り出された宍戸文六様をお恨み申す」

伝之丈が黙って頷いた。

磐音は視線を中之門に向けた。

すると風呂敷包みを手した中居半蔵がゆったりと石の坂道を上がってきた。供の者は中間姿の早足の仁助だ。

二人の背後で中之門が鈍い音を立てて閉じられた。